

バン

東日本大震災の発生から3週間、気仙沼市の沖合1.8キロのところで一匹の犬が救助されました。

名はバンというそうです。

「飼い主と無事に再会したバンは、とても嬉しそうにしていた」というニュースは、被災地の厳しい状況を伝える報道が多い中、少し救われるような、ほっとする気持ちになりました。

恐らく、飼い主の方も、生き別れになった我が子に再会したような気持ちであったろうと思います。我が家にも「太郎」という名の犬がおりますので、容易に想像がつかます。

かつて私は、有珠山の噴火の際、災害対策担当の一員として現地災害対策本部におりました。有珠山噴火を目前にして、伊達市や虻田町などの周辺住民の皆さんが避難命令を受けて大挙避難されましたが、避難所での生活が続くうちに避難者から様々な要望やクレームが出されるようになりました。

例えば、トイレの問題は深刻でした。また、洗濯したいが洗濯機が無いとか、何時も同じような食事なので、何とかならないかといった要望まで多岐にわたっており、机上で考えてきたことの限界を感じたものです。

そうした中で、ペットや家畜の問題もかなり深刻だと感じました。ペットや家畜は、世話をしなければ死んでしまいます。特に、乳牛は毎日搾乳しなければなりませんし、酪農家の方々は大変心配されていました。ですから、有珠山噴火の際も、避難命令が出ているにもかかわらずペットや家畜のえさやりに自宅に戻ってしまった人も出たくらいです。

私も、いざというとき、太郎をおいて自分たちだけ避難できるかといえど自信がありません。何時も太郎と同じ布団で寝ているということもありますが、ペットも正に家族の一員、これはペットを飼っている人の共通の思いでしょう。

行政は、災害の際、人命を守ることを最優先にしますので、ペットや家畜

のことについての配慮が必ずしも十分ではないと思います。

例えば、殆どの避難場所ではペットの持ち込みができない状況にあります。動物アレルギーの人もいますから、致し方ない面もありますが、避難者の心のケアを考えますとペットの存在は重要です。避難場所の設置の際には、ペットとの共生を図る観点に立った配慮が欠かせないと思います。

今回の東日本大震災の被災地における避難場所や被災者の状況を見ると、災害から人命を如何に守るかということと同様に、避難生活が数日では済まないケースを想定した対策が極めて重要であると、改めて強く感じています。

(塾頭 吉田 洋一)